

5421 12/11

「丹後・若州・越州、浦辺波を打ち上げ、在家ごとごとく押し流す、人死ぬ事数知らず」と云々——
これは、戦国時代の京都の神主吉田兼見の日記「兼見卿記」の一説だ。1586年の天正地震の際、大津波が京都から福井にかけて若狭湾沿岸を襲い、民家を押し流し、数え切れない死者が出たと記されている。

古い文献 再検証進む

計画には反映されていなかった。東日本大震災を受け、同県は津波の被害想定の見直しを始め、「兼見卿記」などの過去の文献も調べ直している。
過去の津波の記録は各地に残されており、今回の震災を機に再検証

証が進んでいる。慶長三陸地震（1611年）では、これまで信頼性が疑問視されていた史料があったが、今回の震災の被害状況などと照らし合わせると「十分信頼できる」という研究報告も出ている。
同地震を調査している東北大学の蝦名裕一・教育研究支援者（日本史）は「古文書には、先人たちが大災害に直面しながらも、克服していく姿も記されている。復興という視点からも、様々な史料を読み直すことは重要だ」と話す。

才九日地震。壬生。産壊。存家。より。壊。多。此。より。丹後。若州。越州。浦。を。修。り。上。存。家。悉。押。流。へ。多。し。り。を。知。れ。ず。江。州。若。州。以。外。人。あ。ら。ず。
天正地震で若狭湾に津波が襲来したことを記す古文書「兼見卿記」の一部（東京大学史料編纂所蔵）